

児童主体で学びを深める社会科

仙台市立錦ヶ丘小学校 教諭 長谷川 菜々

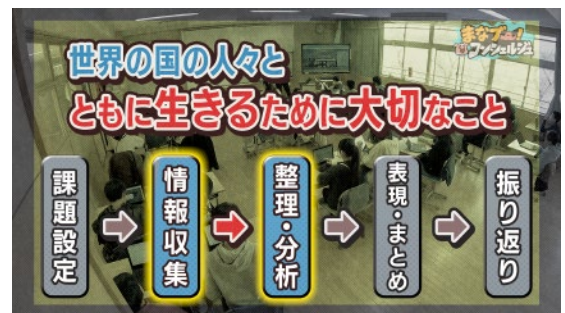
単元のねらいと展開

今回の授業は、小学6年生の社会科「日本とつながりの深い国々」で実践しました。小単元の目標は「外国の人々の生活の様子などに着目して、各種の資料で調べ、まとめ、日本の文化や習慣との違いを捉え、国際交流の果たす役割を考え、表現することを通して、我が国の経済や文化などの面でつながりが深い国の人々の生活は多様であることを理解するとともに、スポーツや文化などを通して他国と交流し、異なる文化や習慣を尊重し合うことが大切であることを理解することができる」です。

「児童主体の学び」とするために、「課題設定→情報収集→整理・分析→表現→振り返り」という探究のサイクルで学習を展開しました。

「課題設定、情報収集」では、児童一人一人が調べたい国を自分で決定し、学習の計画を決め、情報を収集するためのツールも自分に合ったものを決定する、**個別最適な学び**を意識しました。

単元中盤から後半の「整理・分析」と「表現」では、グループで対話をしながら学習問題の解決と動画づくりに取り組む**協働的な学び**を実現しました。根拠に基づいた自分の考えを持つこと、友達と共に考えの合意形成を図ること、そして、試行錯誤しながら答えをつくりあげていく学びにすることを目指しました。



授業の流れとポイント

①課題を設定する（番組一斉視聴・個別視聴）

単元の導入では、「社会にドキリ」の「世界の国の人々」をクラス全員で一斉視聴しました。番組を視聴して、子供たちから出た疑問や知りたいという声をもとに、単元を貫く学習問題「世界の人々とともに生きるために大切なことはなんだろう」を設定しました。クラス全員が同じ映像や情報をもとに疑問や興味をふくらませることができるので、単元の導入では番組を全体視聴して素直な子どもたちの声を取り上げることを大切にしています。

その後、番組をもう一度個別視聴したり、デジタル教科書を確認したりしながら、学習問題を解決するために特に自分が調べたい国（課題の国）を決定しました。すでに学習していた「日本と関係の深い国」の中から決めるようにしたこともポイントです。

②課題を解決するための情報を収集する（番組・動画クリップ独自視聴）

課題の国について調べるために、家庭や授業で情報を収集する時間を設けました。情報収集のためのコンテンツは、デジタル教科書、NHK for School の番組、動画クリップ、資料集、インターネットなどがあり、どれを活用するかは

児童に委ねています。日本と関係の深い国について2分程度にまとめられた分かりやすい動画クリップが充実しているため、「社会にドキリ」に紐づいた動画クリップを視聴して情報を得る児童が多くいました。

児童に、情報収集の仕方を任せることを含め、子どもたちのメディアリテラシーを育むことも日々の授業の中で大切にしています。



③グループで情報を整理分析し、学習問題の答えを考える

調べた国の情報をグループ内で伝え合い、日本と似ている点やちがう点についてまとめていきました。本単元で共通の目標としているルーブリックに「複数の視点で考える」というポイントがあるので、どのグループも生活や文化、スポーツなど、複数の観点で日本と比較することができました。

日本と似ている点やちがう点をふまえたうえで、「世界の人たちと共に生きるために大切なことはなんだろう」という学習問題に対する答えをグループ内で考えました。考えるヒントにするために、もう一度「社会にドキリ」の「世界の国の人々」を視聴しているグループもありました。NHK for School の検索欄に「共生」というキーワードを入れて検索してヒットした、別の番組をヒントとして視聴しているグループもありました。ここでも、どのコンテンツを活用するかは自由としていますが、子どもたちのメディアリテラシーが育ってきているからこそ、上手に番組を活用できるようになってきています。



「児童主体の学び」で私が大切にしていること

「児童主体の学び」を実現するために大切にしていることは、子どもたちに「学び方」を身に付けさせるということです。世の中がどんどん変化していく未来を生きるために、何を学ぶかという内容知ももちろん大切ですが、どのように学ぶかという方法知も同時に大切にする必要があります。そして、学び方を子ども自身が自覚し、自分に合った学び方はなんだろうかと考え、学び手として成長して行ってほしいという願いをもって授業をしています。その中でも、今年特に大切にしたい3つが「課題の持ち方」「考える手立てとしての思考ツール」「学び方を振り返り、次に生かす」ということです。

①課題の持ち方

「児童主体の学び」にするために大切になってくるのは、子ども自身が課題を持つということです。自分で疑問や不思議を探して、課題を持って学びに向かえば、解決したいという自分の意欲が出発点となっているので、学びに対しても主体的になることができます。しかし、ただ課題を探しましょうと指示するだけでは、課題を見つけることができません。

教師側は、不思議や疑問をふくらませる仕掛けを考える必要があり、子どもたちはどこに目を向ければいいのかという課題発見能力を身につける必要があります。両者の大きな手立てとして私が活用してきたのが「社会にドキリ」の番組です。

「社会にドキリ」には、単元のねらいにつながる不思議や疑問を自分事としてふくらませる工夫が多くあるので、子どもたちは番組を楽しんで視聴しながら、心の中に不思議がふくらんでいきます。その不思議を集め、何を追究したいか自分の思いにじっくり向き合うことで、子供たちは自分の課題を決定することができました。

②考える手立てとしての思考ツール

子供たちに学びを委ねるためには、子供たちが自分たちの力で情報を整理・分析し、考えをつくり出す力を育む必要があります。その手立てとして系統立てて指導したことの一つが「思考ツール」です。子供たちが互いに持ち寄った多くの情報を整理・分析するためには、共通の考える手立てが必要です。その手立てが思考ツールだと考えました。

共通点や相違点を見いだすためにはベン図、情報を構造的に整理し考えをまとめていくためにはピラミッドチャートなど、どのように情報を整理したいのか、整理した情報からどのように分析したいのかという、思考スキルに応じた思考ツールの使い方をクラス全員が理解していることで、教師からの指示やワークシートの配布がなくても適切に情報を整理・分析することができます。低学年から系統立てて指導していくことで、高学年では自分たちの判断で活用することができるようになります。思考ツールの活用があったからこそ、児童主体の学びを進めることができました。



③学び方を振り返り、次に生かす

「児童主体の学び」を実現していくためには、子供自身が自分の学び方はどうだったのかメタ認知し、改善策を次の学習に生かしていくことが大切です。ルーブリックをもとに自分の学び方について振り返り、次単元に生かすというサイクルを1年間継続してきました。学び方を振り返ることもただ委ねただけではできるようになりません。何を振り返ればいいのか、良い振り返りとは何なのか、最初はクラス全体で丁寧に共通認識することで、徐々に自分の学びを客観的に振り返ることができるようになりました。

大切にしてきたことは、1年間の振り返りを蓄積してすぐに振り返られるようにしたこと、他者参照できるようにして互いに見合えるようにしたこと、そして自己評価だけでなく教師や友達からの他者評価もしたこと。このサイクルを繰り返したことで、子供たちは客観的に自分の学び方を見つめ、学び方の改善を繰り返して、良い学び手に成長してくれていると思います。

『社会にドキリ』のおすすめポイント



『社会にドキリ』のおすすめポイントは何よりも「児童主体の学び」にぴったりだということです。答えを教えて終わりという知識伝達型の番組ではなく、子供たちの身近にある疑問や不思議を、登場人物を通して楽しく気付かせてくれます。楽しみながらも「なぜだろう?」「自分ならどうするだろうか?」という課題を持たせてくれるので、子供たちに主体的に学習させたいと教師が考えたときに学習の導入場面で大きな手立てとなってくれます。

また、番組では単元でおさえなくてはならない社会科の内容が分かりやすく盛り込まれているので、クラス全体で大まかな学習内容をとらえたいときにも最適です。番組も動画クリップも社会科のねらいに合わせて制作された信用できる情報です。今、子供たちの周りにはたくさんの情報コンテンツがあふれていますが、そのコンテンツは玉石混交です。子供たちに学びを委ねるときに、安心して活用をおすすめできる番組と動画クリップは「児童主体の学び」を実現するうえで、教師の大きな手立てとなると思います。